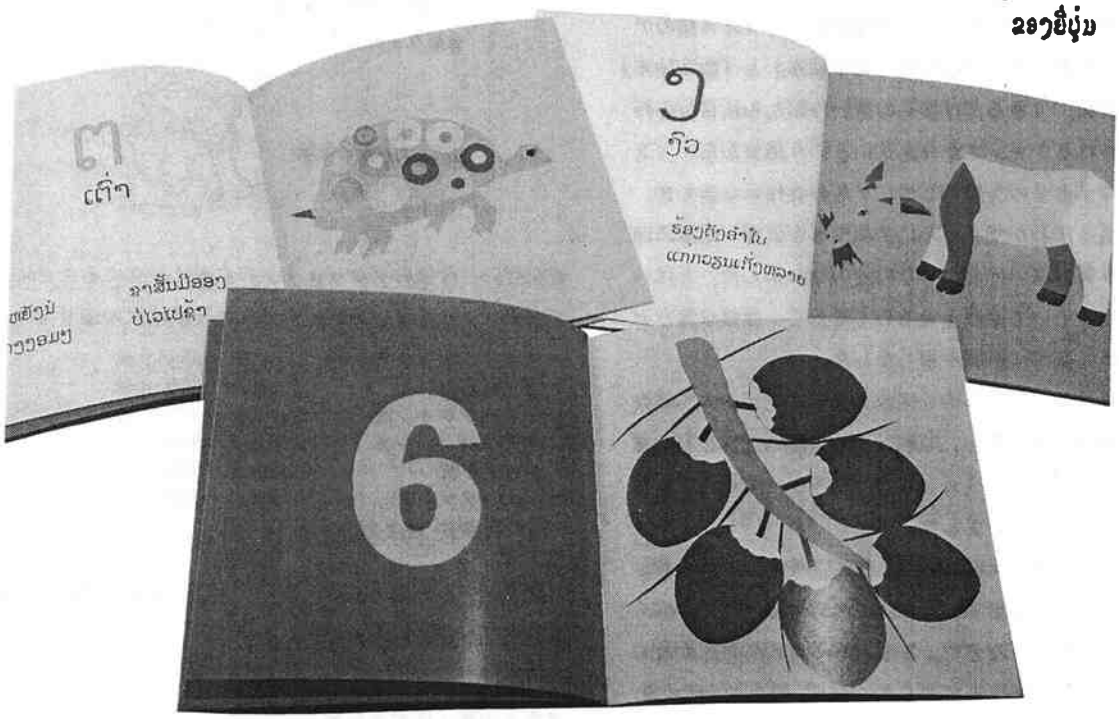
発行：A.S.P.B.（ラオスの子供に絵本を送る会）〒143東京都大田区南馬込6-29-12ミキハイツ303 TEL/FAX03(3755)1603

ラオスのこども通信 9号

（1997年４月発行）



■１９９６年　活動報告■

２年がかりで絵本が完成。

今からさかのぼること１年と少々。96年を迎えるにあたって立てた基本方針は、
「今年はプロジェクトを拡げずに、手堅くいこう」でした。なにしろ低金利・不況で資金が厳しく、
人手も不足して、広げるどころではない、というのが主な理由だったのです。
ところが、これからお知らせする「1996年 活動報告」は、そんなこととは趣を異にすることになります。
ヴィエンチャン事務所のラオス・スタッフが積極的にプロジェクト運営を行ったことにより、
結果として例年以上の活動となりました。
とりわけ「学校図書室の整備事業」、『文字絵本』『数字絵本』の出版など大きな成果がありました。
その一方で、「子ども文化センター」をめぐる、ラオス・サイドと私たちとの思惑のズレなど、
問題点が明らかになった年でもありました。

［出版プロジェクト］

１年間にラオスで出版された子どもの本は４、５点のみ

読書推進活動運動の責任者であるコンドゥアン・ラオス国立図書館長は、「今年１年間でラオス国内で出版された書籍は大人向け子ども向け合わせて49タイトル、子ども向けに限ると４～５タイトルに過ぎない」と語っています。

これまで当会が多くの方々のご協力により出版してきた子ども用各種図書は、51タイトル、累計で約21万部になりました。近年いくつかのＮＧＯがラオス語図書を出版していますが、継続して行っているのは当会を含めて２～３団体ほど。ラオスにおいて「本が少ない」という事態に根本的な変化はありません。相変わらず、図書箱に詰める本の確保に苦労する状況が続いています。

■文字・数字絵本出版■

生みの苦しみと、大きな感動！

96年３月、絵本作家わかやまけんさんを講師にお招きし、絵本作家の育成を目的とした「絵本づくりセミナー」を開催。若いラオス人作家たちに絵本作りの実際を体験してもらいました。その際、セミナーの成果としてラオス語のアルファベットをモチーフにした『文字絵本』と『数字絵本』の出版を計画。できるだけ多くの若い作家たちに自分の作品が出版されるチャンスを与えたいという趣旨から、『文字絵本』は１と２の２巻にして、７名の合作としました。

東京に戻ったわかやまさんに添削指導を依頼。出版に向けて、より質の高い作品づくりの努力をしました。とはいえ地方在住者もいて連絡をとるのも難しく、原稿収集などのやり取りに非常に時間を要しました。

原稿は夏になってようやく完成。デザイナーの大竹雄介さんのご協力で装丁をし、印刷はラオス国内では必要な厚紙用紙が入手しにくいうえ、きれいなカラー印刷ができないためバンコクで行いました。

見積もりが予算を大幅に超え、色校正やサンプルのやりとりがスムーズに進まず、「今は王様の仕事で忙しいから」と後回しにされたりなどで、各段階で予想外の遅れが積み重なったものの97年１月にようやく完成（各5,000部／カラー）。ラオスの教育関係者からは「過去ラオスの児童図書の中で最も高い水準にある」との声が上がるなど、大きな感動を生みました。

『文字・数字絵本』は「郵政省国際ボランティア貯金」などの支援によりました。

■絵とき辞書■

第２版2,500冊。小中学校に配付。

昨年の初版4,500冊に引き続き、第２版2,500冊を山田国際財団設立委員会などのご支援により出版しました。このラオス初の子ども用国語辞典「絵とき辞書」は、現地で大好評で迎えられています。

出版した辞書は、各県教育委員会の協力を得て、比較的輸送しやすいところから順に、各小中学校に２冊ずつ無料配布しています。

配付方法は、当会のスタッフと国立図書館や教育省のスタッフが、まず各県や郡の教育委員会まで運びます。そして各学校の先生がその教育委員会に集まり、持ち帰ってもらいます。その際、学校の状況などに関するアンケート調査を行い、今後のプロジェクトの立案に役立てることにしています。これまでの配布先と配付時期は次の通りです。

・ヴィエンチャン特別市	1,500部	95年９月
・国立図書館	1,080部	95年10月
・ヴィエンチャン県	1,010部	96年１月
・ルアンパバーン県	1,310部	96年４月
・サヤブリ県	800部	96年10月
・シェンクワン県	950部	96年11月
・市内図書室・東京分など	163部	
・予備	187部	

96年秋には内容の改訂も行い、さらに増刷を決定。97年2月に3,000冊の印刷が完了します。

■古典出版・図書再版■

小学生から高校生まで人気のラオス昔噺。

子どもたちになじみのある昔噺は人気があります。また、当会でこれまで出版した図書に再版の要望が多く寄せられています。本年は以下の作品でそれらに応えていきました。再版をしたのは、いずれも国立図書館でも会でも在庫ぎれのもので、出版委員会よりの強い要請で行いました。

『**シートンマノラー**』5,000部（１色刷り/表紙:カラー）†
昨年から原稿が提出されていましたが、原稿の最終仕上げの段階で作者の親族が病気になり、出版予定が大幅に遅れてしまいました。

『**チャオペッサラート**』2,000部（１色刷り）†
92年にラオスの社会科学委員会により出版許可されたラオスの英雄伝。

『**マホーソット博士**』再版　2,000部（１色刷り）†

『**孤児と小さなおばけ**』再版　1,000部（１色刷り）◆

『**シンサイ１**』再版　1,000部（１色刷り/表紙:カラー）◆

『**シンサイ２**』再版　1,000部（１色刷り/表紙:カラー）◆

いずれもラオスでよく知られた昔噺。文字が多いにもかかわらず小学生もよく読み、高校生まで幅広い層で支持をされています。図書箱の利用状況の調査では、これらの本は特にボロボロになって

おり、人気の高さを示しています。
『シンサイ』は全４巻。３・４巻を後から多く印刷したため、図書箱によっては３・４巻しか入っておらず、１・２巻が欲しいという要望が多く寄せられていました。
†は「郵政省国際ボランティア貯金」「東九州女子短期大学」などの支援。
◆はユニセフと会との共同出版です。

■創作絵本出版■

新作に挑戦して。

賢いのはどっち？（パイサラート）　3,000部(カラー)◎

子ガエルやーい（メイコップソークルーク）

5,000部(カラー)◇

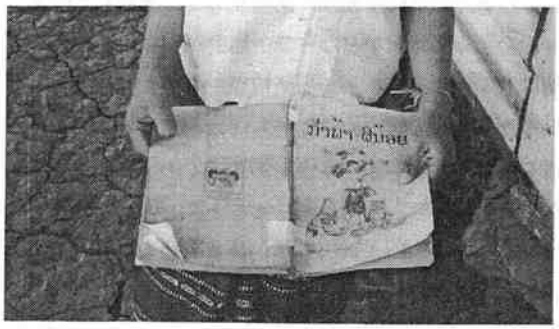
（支援／◎：地球市民財団　◇：東京海上火災株式会社）

『賢いのはどっち？』は、おじいさんが２人の娘婿に、「どうしてガチョウは大きな声で鳴くのか？」など動物について質問して、娘婿の答えを比較しながら、どちらが頭がよいのかを、読者である子どもたちに尋ねている絵本。

『子ガエルやーい』は、虫取りに夢中になるあまりに、はぐれてしまった子ガエルを母カエルが捜すお話。母ガエルは、ウシガエルやタニシ、クモ、チョウなどをたずねてまわり、子ガエルがヘビに飲み込まれそうになっているところを、出会った生き物たちと力を合わせて助け出します。

●「出版委員会」は、残念ながら活動中止。

これまで会の出版コーディネーターが選択していた出版図書決定について、より公正でバランスの良い決定とするために、作家、教育関係者、役人、図書館関係者などで構成される現地「出版委員会」を情報文化省の機関として発足させました。しかし役所内部での事務手続きに問題があり、正式認可がとれず、残念ながら活動中止になってしまいました。出版についてのルール、システム作りは今後とも検討していかなければならない課題と考えています。



子どもたちに読み込まれてボロボロになった本

［移動図書箱・図書袋プロジェクト］

軽くて運びやすいのが図書袋。

あらゆる種類の図書が少なく、本屋も本の流通システムもほとんどないのがラオス。それに対して会では92年から「移動図書箱」で本を全国へ配布してきました。子ども・一般・教員向けの書籍約150冊を、70×80×25cmほどの木製の箱(開くと本棚になる)「移動図書箱」に詰め、全国の小学校に配布し、その箱を図書館として機能させるものです。これは識字と読書習慣の定着化を目的とするラオス政府の

国家プロジェクト「読書推進運動」の支援として行われています。

ラオス政府は「2000年までにすべての小学校に移動図書箱を」という目標をたてています。ラオスには約7,600の小学校がありますが、本年末までに3,450校に移動図書箱または図書袋の配布を終えたに過ぎません。当会では、これまで520箱の図書箱と200袋の図書袋を支援してきました。

95年に製作した移動図書箱50箱は、以下のような日程で配布し、配布セミナーも行われました。

・ラクサオ特別自治区　　２５箱　3月26～29日
・ルアンパバーン県　　２５箱　4月 8～11日

配付セミナーの講師は、ヴィエンチャンから同行する国立図書館員、教育省スタッフ、会スタッフがおこない、周辺の各小中学校から１名の教員が参加します。これまで読書をした経験のない先生も多く、読書の楽しさ、子どもたちへの読み聞かせの方法、図書管理の方法などを伝え、各参加者（学校）に図書箱を渡し、持ち帰ってもらいます。

山間部などでも運搬しやすいように、軽量化を図ったのが図書箱に代わる図書袋です。1月～5月に100袋、6～8月にさらに100袋を製作。各袋には国立図書館スタッフと当会スタッフによって約70冊の図書が詰められました。

8月～11月には図書箱50箱を製作。各箱には約150冊の図書が詰められました。図書箱と図書袋の配布は、各県教育

委員会の協力のもと、国立図書館スタッフと当会現地スタッフにより、以下の日程で行われました。

・ルアンパバーン県	30袋	10月 7～17日
・シェンクワン県	40袋	11月11～15日
・ボリカムサイ県	30袋	11月26～12月1日
・チャムパサック県	30袋＋20箱	12月 9～13日
・サヤブリ県	70袋＋30箱	12月26～1月9日

配布と同時に、これまで配布した箱に対する図書の補充と、利用状況や今後の要望などを調査するフォローアップも実施しました。日程の合間には、地元の教育委員会や情報文化省のスタッフなどとミーティングをおこない、現地の状況把握や今後の計画のための調査、調整をしました。

本プロジェクトは主に、図書箱関係は「郵政省国際ボランティア貯金」、図書袋関係は「国際開発救援財団（ＦＩＤＲ）」からの支援によって行われました。

［子ども文化センター（ＣＣＣ）］

伝統の踊りなど、「習い事」に人気が集中。

隣国タイから流れ込むＴＶ番組にかじりつき、その結果、姉妹語であるタイ語がラオス語と区別されないまま、日常生活に頻繁に用いられるようになっているというのが、近年のラオスの子どもたちの状況です。ＴＶ番組と共に流れ込む数多くの商品も子どもの世界を変え始めました。

「子ども文化センター」は、このような子どもたちの状況に心を痛めた、会代表チャンタソン・インタヴォンと、現地受け入れ責任者であった情報文化省のダラーさんとののアイデアで、「学校教育では行われていない、図画工作、音楽、スポーツ等ができる施設と図書室とを作り、教育環境を変えよう」と94年６月に生まれました。

ラオス初の情操教育施設ということで、最初は活動内容に半信半疑であった周囲の大人たちも、活動が定着するに従って協力的になり、現在ではラオス全国各地からＣＣＣを作りたいとの要望が殺到しています。97年には、ルアンパバーン県に４番目のＣＣＣが開設される予定です。

ところが８月に行った現地調査では、活動参加者が一部上流階級層の子どもたちに限られてきている傾向があることが明らかになりました。子どもたちに「自己表現」の訓練の機会を提供するというより、「習い事」教室に重点が置かれた運営方針に変化しているのです。今後会としてはどのようにＣＣを支援していくか、改めて検討する必要が生じてきています。

■ヴィエンチャンＣＣＣ■

本年夏以降、これまでＣＣＣの中心施設であった、ヴィエンチャンのＣＣＣの活動が停滞気味になっています。かつては毎日100人ほどの子どもたちが通ってきたのですが、急激に減少。類似の施設が近隣にできたことがその理由と思われ、また、利用者と講座の増加に会の支援金額が十分ではなくなってきていたことも理由として考えられます。

文化センターの運営状態の調査と、運営改善のアドバイスのため、97年1月よりメンバーを派遣する予定で、その結果によっては何らかの抜本的な対応策が必要になると考えられます。なかなか頭の痛い問題です。

■ボリカムサイＣＣＣ■

８月に会の活動ボランティアが各地のＣＣＣを訪問し、現在の活動状況や今後の現地側の希望などについて調査をしました。その結果を踏まえ、秋に作られたラオスのＣＣＣ建物の概念設計図を参考に、ボリカムサイＣＣＣの設計図を作成する準備が進んでいます。

・これまではナイトクラブに使われていた建物を転用していましたが、来年春には隣接地に図書室と事務室などの建物が着工となり、夏までに完成する予定です。

■サヤブリＣＣＣ■

熱心な指導者により、非常に活動が活発なサヤブリＣＣＣは、これまで小学校の教室に間借りして、活動してきました。そのため夏休みなどは一日中活動が出来るものの、平常時は放課後に限られ、参加希望者を十分に受け入れられなかったり、他の学校の子供たちには利用しづらい面がありました。それに対し、県当局から近くの建物を提供するとの申し出があり、夏に移転しました。しかし建物が古く、状態が非常に悪いため、早急に予算措置をとり、改修する必要があります。

また、子どもたちに大変人気のある伝統音楽教室のため

の楽器提供についての強い要請がきています。

子ども文化センタープロジェクトは、主に「郵政省国際ボランティア貯金」からの支援により行われています。

■日本人専門家派遣セミナー■

ＣＣＣなどを拠点に、教育関係者や子どもたちに絵を描く楽しさ、ものを作る楽しさを伝えるために、昨年に続き２月29日から３月31日の日程で、浅葉和子さん、尾崎曜子さん、やべみつのりさんの３名の日本人専門家を現地に派遣し、図画工作セミナーを開催しました。このセミナーの補助をするため、近藤道子さんと古内忠輔さんが同行してくれました。

サヤブリＣＣＣにて、指導者向けと子ども向けの絵画造形セミナーを行った他、会が図書室の整備運営支援をしているヴィエンチャン近郊の学校にて、子ども向けの絵画教室、造形教室、野焼きなどを実施しました。また、現地からの強い要請により、ヴィエンチャンＣＣＣにて教育関係者向けの紙芝居製作セミナーも実施しました。

現地で好評であったこれらのセミナーは、さらに継続、発展させ、97年３月にも引き続き実施します。

専門家派遣は「郵政省国際ボランティア貯金」の支援により行われました。

■日本人専門家派遣■

国際建設技術協会の支援を受け、８月２日から17日まで、ＣＣＣの今後の施設計画を考えるために、建築の専門家として会の野口朝夫を派遣しました。５都市、15か所の教育委員会、ＣＣＣなどで、教育や子どもの現況、ＣＣＣの運営状況、建設技術調査などをおこないました。この調査をもとに、ラオス「子ども文化センター」概念設計図が作成され、来年建設されるボリカムサイＣＣＣ図書館設計に生かされます。

［子ども文庫（学校図書室）プロジェクト］

これまでラオスの小学校には無いに等しい学校図書室を整備、開設し、身近にいつも本がある環境をつくり、より

広範な子どもたちに文字文化の浸透を計るため、95年より本プロジェクトはスタートしました。

昨年は、ヴィエンチャン特別市内の５校の小学校でまず開設。これらの学校は比較的事務所からも近く、頻繁にフォローアップや利用促進セミナーを行うことで、大変充実した活動を行っています。各学校では図書室担当の先生を決め、活動の報告や補充図書の希望などを出してもらうようにしています。熱心なところでは、夏休み中も、担当の先生に手当を出し、週３日ほど図書室を開いたとのことです。これらの図書室は、学校の子どもたちだけでなく、周辺の大人も利用できるようになっています。

これらの成果を受けて、本年は新たに地方でも開設を計画。受け入れ体制がよく、読書推進運動が充実しているルアンパバーン、サヤブリの２県で行うことにしました。

会メンバーが現地で調査を行った結果、高校の図書室開設希望の声が非常に高いことがわかりました。これまでの移動図書箱・図書室の配布は、小学校中心で行われており、高校には配られていません。高校は地方では各郡に１校しかなく、かなり遠いところからも生徒が通って来ているのですが、せっかく高校に来ても読む本が全くないという状態です。そこで本年は、高校に図書室を開設することで、将来的には、周辺のセンターになることを目指して、本プロジェクトを進めていくこととしました。

高校では、要望の多かった英語の辞書や理数科の副教材となる図書の補充に重点をおきました（これらの図書はラオスではまだ出版されていないため、タイ語図書を購入）。図書室の開設は、ほとんどの学校では昨年同様、空教室を利用し、本棚を整備しましたが、２校については建物が古く、周辺の村人の協力で全面的に改修、新築しました。

本年は当初８校開設する予定でしたが、現地から強い要請があり、当会が配布した移動図書箱を空教室に置いて、すでに自主的に図書室活動を始めていたいくつかの学校も

仲間に入れて欲しいとのことで、結局、合わせて14校の図書室整備支援となりました。

現在当会がラオスで開設、支援している学校図書室は以下の通りです。

・ヴィエンチャン県：４小学校、２小中学校
・ルアンパバーン県：２高校、４小学校
・サヤブリー県：４高校、１小中学校、１小学校
・シェンクワン県：１中学校

これら学校図書室整備・開設プロジェクトは会の中心的なプロジェクトに育ってきました。

本プロジェクトは、外務省ＮＧＯ補助金と世田谷区立中央図書館で行われている「ご縁市」での収益金などにより行われています。

［会の運営］

●現地スタッフ日本研修

５月10日から26日、当会現地スタッフ責任者パダプペットが研修のため来日。文庫活動を中心に、図書館、児童書店、児童館などを視察しました。

この研修は「郵政省国際ボランティア貯金」と数多くの方のご協力により実現しました。

●調査・調整・セミナー派遣

本年は会の予算による調査調整のためのメンバー派遣を３回実施しました。

1　11月16日～97年2月7日　赤井朱子
2　3月3日～3月23日　チャンタソン・インタヴォン
3　8月1日～8月30日　チャンタソン・インタヴォン

この他の所用、プロジェクト視察同行などの目的で野口朝夫、チャンタソン・インタヴォン、高野はる子がラオスを訪問し、同時に現地事務所との調整を行っています。

■東京事務所■

昨年末から約２か月半、スタッフの赤井朱子が現地事務所に出張し、現地スタッフとともにプロジェクト運営を行い、コミュニケーションの向上に役立ちました。しかし、この出張が各種活動補助金申請時期に重なったことにより、東京事務所の業務が大きくボランティアの肩にかかることになりました。

資金集めのための積極的な対応について、必要性は十分に認識されているものの、余裕不足から出来ませんでした。各種イベント参加についても十分とはいえません。さらに東京での活動の重要な項目である、ニュースレター『通信』も、５月、９月の２回しか発行できませんでした。

このような東京での活動の限界は、ひとえにボランティアの人材不足に由来します。また、若い方を中心に活動参加希望者が多いにも関わらず、こちら側の余裕のなさから、なかなかうまくネットワーク化する事が出来ないでいます。このような状況に対し、11月から月１回の定例会に勉強会を開催すること、ラオス語の勉強会を毎週開くなどの対応により、活性化改善策を行っていますが、実を結ぶのはこれからとなります。

秋になり、新たに山崎佳子が専従スタッフとして雇用されました。山崎は、東北タイでのフィールドワークの経験もあり、新たな戦力として大変期待されます。

■国内活動■

・ラオス料理教室　２月17日

これまでも希望が寄せられていたラオス料理の講習会を一般に呼びかけて行いました。雪の中、会場の大田区立馬込文化センターに27名が参加し、会代表チャンタソンの指導のもと、ラオス料理作りに挑戦しました。

・サバイディ・ピーマイ）４月21日

恒例のラオスの正月を祝う会「サバイディ・ピーマイ」を東京ガス大田支社さんのご協力により行いました。今回は駐日ラオス大使も参加くださり、100名近くの参加者とともに、会の活動報告の後、ラオス料理に舌づつみを打ちました。

東京事務所でのミーティング

１９９６年　会計報告書 (1996.1.1～1996.12.31)

会の収入は、個人の方からのご寄付と団体、政府関連機関からの補助金により確保されている。96年は、長期的な景気の不況が続いていること、金利の低下によりＮＧＯ団体に対する補助金が減少していることなどから、収入が予算額に達せず、厳しい環境であった。さらに、会のニュースレターの発行が２回だけであったことも収入に影響を与えたといえよう。しかしそのような環境の中でも、のべ601名という多くの方よりご支援をいただいたことは感謝に堪えない。全体にプロジェクトの抑制を心していたものの、本年度の繰越金を含む収入総額は昨年度実績より20%ほど大きくなっている。収入に占める団体寄付の割合は65%、その内、郵政省ボランティア貯金が42%と相変わらず高く、今後の課題として残っている。

支出は『文字･数字絵本』の出版が年度を越したこと、創作絵本の出版が少なかったこと、子ども文化センター本部の建設がラオス政府の都合で延期されたことなどにより、予算より決算が少なくなっている。その一方で、図書袋が多く作られたり、子ども文化センター建設調査が行われたり、ラオス事務所が広いスペースに移転した分などで支出が増加している。

今年から、現地会計がコンピューター化され、また専任スタッフが雇用されたことにより、会計書類の送達が迅速になされるようになってきた。また東京でも会計ソフトを研究し、効率よいデーター整理を試行している。

■前期より繰越	8,174,057円	8,174,059円	プロジェクト未払いを含む
■収入の部	＜予　算＞	＜決　算＞	＜摘　要＞
一般寄付（のべ587件）	7,000,000円	3,966,644円	出雲大社より分含む
辞書指定一般寄付（のべ14件）		67,000円	
プロジェクト援助金	12,750,000円	11,353,984円	郵政省国際ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ貯金　¥7,368,000 国際開発救援財団　¥1,869,000 外務省ＮＧＯ事業補助金　¥692,920 国際建設技術協会　¥664,000 東京海上火災保険株式会社　¥410,434 地球市民財団　¥300,000 他　¥49,630
イベント収入	500,000円	872,230円	ﾊﾟｰﾃｨ参加費 ｺｰﾋｰ等売上「ご縁市」配分
雑収入	500,000円	197,604円	為替差益、受取利息等
本・絵はがき等売上		154,879円	
使用済みテレホンカード売却		29,500円	
配布図書譲渡		925,871円	現地事務所扱い
小計	20,750,000円	17,567,712円	
■支出の部			
1.プロジェクト経費			
●絵本一冊運動			
＜出版プロジェクト＞			
絵とき辞書印刷費	735,000円	1,676,000円	第２版2500冊残金+第３版3000冊前金
古典出版 図書再版	2,362,500円	1,756,324円	「ｼｰﾄﾝﾏﾉﾗ」5000冊「ﾁｬｵﾍﾞｯｻﾗｰﾄ」 2000冊 「ﾏﾎｰｿｯﾄ博士」2000冊「ｼﾝｻｲ1.2」各1000冊 「孤児と小さなおばけ」1000冊
文字・数字絵本出版	2,835,000円	595,106円	前金分(残金は97年1月支払)計15000冊
創作絵本出版	3,150,000円	840,155円	「子ガエルやーい」5000冊 「賞いのはどっち？」3000冊
『ワイデック』出版援助	157,500円	0円	子ども用雑誌発行支援
小計	9,240,000円	4,867,585円	
＜移動図書箱　図書袋プロジェクト＞			
移動図書箱製作費	735,000円	677,272円	箱製作＋本代 50ｾｯﾄ分
配布セミナー費	178,500円	659,020円	箱50＋袋200の配布、配布時ｾﾐﾅｰ費用
フォローアップ費	210,000円		配布ｾﾐﾅｰ費に分類
補充用図書購入費	525,000円	778,357円	ﾗｵｽ ﾀｲ 日本で購入
図書袋製作費	630,000円	1,245,227円	袋製作＋本代 200ｾｯﾄ
袋地方輸送費	105,000円	115,652円	補充図書などの地方配送費
小計	2,383,500円	3,475,528円	
＜統括管理＞			
通信費	63,000円	148,545円	当ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ該当分（全通信費の20%）
出版コーディネーター人件費	73,500円	140,700円	現地ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ1名＋出版委員会運営人件費
調査調整 セミナー派遣費	787,500円	440,690円	1月8月の２回実施
小計	924,000円	729,935円	

・ダラーさんの日経アジア賞受賞を祝う会　5月18日

会のラオスでの受け入れ責任者であった、ダラー・カンラヤーさんがバイラーン(貝葉)文献の保存貢献により第一回の日経新聞アジア賞を受賞し、式典のための来日にあわせ、これまで世話になった方々40名ほどが大田区山王会館に集まり、祝う会を行いました。

・イベント参加

10月５，６日 国際協力フェスティバル　日比谷公園

11月２，３日　ＯＴＡふれあいフェスタ　大田区平和島

・ご縁市　２月18日　７月13,14日 10月19,20日 12月14,15日

「ご縁市」は、世田谷区立中央図書館への寄贈図書のうち、図書館で利用されない本を「図書リサイクル協議会」が譲り受け、それを低価格で販売する古本市で、年に４、５回開催されています。図書リサイクル協議会は、子ども文庫、点訳、日本語教育などのボランティア活動を行っているグループで構成されており、当会も95年発足当初より参加しております。協議会参加の各グループは「ご縁市」当日の会場設営、本の運び出し、販売などの業務を行うことにより収益の一部を受け取り、グループの活動に有効利用しています。当会では、この分配された収益金を、主に学校図書室の設立運営支援のために利用しています。

・ラオスＮＧＯ連絡会　12月18日

最近ラオスで活動する日本のＮＧＯが増加しているにのにも関わらず,相互に連絡がほとんどなく、お互い顔も知らないような状況です。そこで、会が呼びかけ人となり、早稲田奉仕園にて顔合わせの会合を持ちました。参加は11団体、１個人となかなか盛況となり、今後必要に応じて,会合を持つことが確認されました。その他にもラオスで活動する団体は数団体はあり、急激に増加している模様です。

・郵政省関連　10月11日　国際ボランティア貯金ＮＧＯ懇話会参加

10月15日　大田区国際ボランティア貯金推進協力会総会出席

11月12,19,25日　東京郵政局ボランティア担当官研修会出席

・日曜勉強会

11月10日　「メコンにたゆたう開発のさざ波・ラオス～開発とコミュニティー・森の民と考える」

磯田厚子さん（女子栄養大学文化栄養学科助教授）

12月　８日　「留学生が語るラオス」

ケオラさん（現在豊橋技術科学大学に留学中）

97年も引き続き、毎月第２日曜日に実施します。

・ラオス語勉強会 11月30日から10回

ラオス語を学ぶチャンスがなかなかない。活動のためにも必要だとの希望から、ポンケオ先生を講師とする勉強会が、事務所を会場にして開かれました。参加者は11名。

全10回だけでは足りないと、97年春から続けて開催することになっています。

＜ヴィエンチャン事務所＞

活動の多様化に伴い、現地スタッフの仕事量が加重になりすぎたため,新たに会計担当としてボケーオと雑務担当のカーオを雇用しました。これにより責任者と、子ども文庫担当者との４名が現地で活動に当たることになりました。また、これまでの事務所が、手狭になってきたこと、路地に入ったところに位置し分かりにくいこと、教育関係者に対するセミナーを開催できるようなスペースが必要になってきていること、などから事務所を秋に移転しました。新事務所はこれまでの所と30ｍと離れておらず、空港への大通りに面する二階建て85坪の町屋で、子ども文庫のほか、倉庫、事務所、セミナースペース、宿泊用の部屋などを持つ充実したものです。

約３年間勤めていた現地責任者のパダプペットが、奨学金を得てオーストラリアに留学することになりました。そのため96年12月よりブンチットを後任として雇用しました。パダプペットは引き続き１年間、現地にて運営アドバイザーとして協力する予定です。このスタッフの交代に伴い、プロジェクトの実施時期に多少変更が有りました。

ヴィエンチャン事務所　セミナー風景

●子ども文化センター（ＣＣＣ）プロジェクト

図書室管理スタッフ人件費	378,000円	446,779円	３カ所のCCC管理ｽﾀｯﾌ
工作室等指導員人件費	189,000円	190,988円	３カ所のCCC
タイ語図書翻訳費	68,250円	120,081円	
図書補充購入費	262,500円	85,882円	３カ所のCCC
教材 備品購入費	787,500円	377,623円	３カ所のCCC
文化センター家賃	378,000円	286,917円	
ＣＣＣ本部建設費	4,200,000円		97年以降に計画延期
ＣＣＣ建設調査費		1,042,731円	8月調査実施 専門家派遣
現地スタッフ日本研修費	325,500円	275,393円	１名　5/10-25実施
専門家派遣セミナー開催費	157,500円	337,839円	2-3月実施
専門家派遣費	472,500円	510,740円	専門家３名派遣　2-3月実施
セミナーＣＣＣ 調整派遣費	787,500円	345,125円	通訳調整員１名派遣
通信費	126,000円	222,818円	当ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ該当分（全通信費の30%）
小計	8,132,250円	4,242,916円	

●子ども文庫プロジェクト

学校図書室整備改修費	262,500円	297,094円	全面改修２校分
資材設備費	131,250円	125,623円	空教室利用１２校分
教材図書購入費	420,000円		
新規図書室用 図書購入費		207,687円	新規開設１４校分
新規図書室用 教材費		56,449円	新規開設１４校分
既図書室用 図書補充費		161,827円	95年開設　５校分
既図書室用 教材補充費		93,712円	95年開設　５校分
図書室利用セミナー費	105,000円	261,498円	2.6.12月の３回実施
タイ語日本語図書翻訳費	126,000円	453,541円	買付費用含む
通信費	63,000円	148,545円	当ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ該当分（全通信費の20%）
絵画指導専門家長期派遣費	362,250円	0円	人材が見つからず延期
派遣員活動費	52,500円	0円	
図工教室教材費	210,000円	0円	
図工教室活動運営費	105,000円	0円	
こども文庫家賃	75,600円	71,120円	文庫ｽﾍﾟｰｽ該当分
現地補助員人件費	126,000円	113,575円	1-5月１名　6-12月２名
図書室運営費		46,748円	
小計	2,039,100円	2,037,419円	

●その他

ルアンパバーン図書館改修補助金		67,800円	窓ガラス取り付け、電灯取り付けなど
頒布品仕入		3,645円	絵はがき・書籍等
小計	1,797,000円	71,445円	

2.会の運営（プロジェクト管理）

＜東京事務所経費＞

事務所家賃	360,000円	360.000円	水道光熱費含む
通信費	300,000円	134,197円	国内外電話 郵便代(ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ該当分除く)
運搬費	50,000円	55,304円	図書・写真ﾊﾟﾈﾙ・ﾗｵｽへの物資等輸送
事務費	100,000円	48,951円	文房具、ｺﾋﾟｰ代、ＦＡＸ用紙代等
広報費	500,000円	415,473円	ﾆｭｰｽﾚﾀｰ発行 発送 7号 1500部 8号1900部
人件費	1,800,000円	1,395,000円	有給ｽﾀｯﾌ給与・通勤手当
法定福利費・福利厚生費		39,400円	有給ｽﾀｯﾌ
交通費	350,000円	42,320円	国内外出交通費等
備品費・消耗品費	50,000円	175,899円	ﾊﾟｿｺﾝ消耗品 ﾌﾟﾘﾝﾀｰ 本 棚 写真ﾌﾟﾘﾝﾄ
諸会費		50,000円	JANIC団体会員費
会議・交際費		34,885円	お礼等
イベント経費	200,000円	294,417円	お正月ﾊﾟｰﾃｨ材料代等
雑費	100,000円	25,576円	送金手数料 租税公課等
勉強会経費		30,000円	講師謝礼
小計	3,610,000円	3,101,422円	

＜ラオス事務所経費＞

事務所家賃	75,600円	102,280円	事務所ｽﾍﾟｰｽ分　10月より新事務所に移転
水道光熱費	3,150円	6,495円	
通信費	10,500円	88,623円	国内外通信費・郵便受取手数料等（ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ該当分除く）
事務費	94,500円	63,337円	書類ｺﾋﾟｰ代等
人件費	315,000円	407,836円	責任者 事務担当 1-5月　1名 6-12月２名
福利厚生費		2,000円	医療費
交通費	31,500円	44,368円	ﾊﾞｲｸｶﾞｿﾘﾝ代
備品費・消耗品費	31,500円	68,672円	ｴｱｺﾝ１台購入
雑費	21,000円	30,011円	自治会費郵便税等
送金受取手数料		97,406円	
小計	582,750円	911,028円	

＜その他＞

予備費	1,812,457円		
□支出合計	28,924,057円	19,437,278円	
□次期繰越金	0円	6,304,493円	ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ未払い分・前払い分を含む

留学生の見たニッポン。
日本の学生たちが感じたラオス。

前号ではケオラさんにラオスについて書いていただきました。今回は、日本についてです。そして、専門家派遣セミナーに同行した学生、そして会の新人ボランティアには、初めてのラオス体験を綴ってもらいました。

ケオラ（留学生）

私がラオスにいたとき、ラオスに日本人がほとんどいないのにもかかわらず、市場で売られている石鹸のような日常生活に必要なものから、オートバイ、車、さらにはラオスのもっとも重要な外貨収入源もが日本製でした。つまり、日本の強さを実感していたのです。日本には学べることがたくさんあると思って、日本へ留学することを希望しました。しかし、実際に日本へ来てみて、ひとつ感じたことは、外から見た日本と内から見た日本は、全然違うという点です。どちらがいいということは自分もわからなく、ただ想像していた日本とはかけ離れていたのです。思った通り日本人は勤勉であるとか、日本の科学技術はとても優れているというようなこともありますが、日本人は全然、愛国心の強い民族に見えなく、そして消極的であることにはとても驚きました。

＊　　＊

日本へ来るまでは、日本語を教えてくれたＪＯＣＶのボランティアの方とヴィエンチャンにある日本大使館員を除けば、日本人に会ったことはほとんどありませんでした。しかし、他の東南アジアの国々と同じように、ラオスにもたくさんの日系企業の製品が売られています。日本は、私たちにとって近いようで遠い国であったのです。

さて、東南アジアの人々は、どんな目で日本を見ていたかについて見てみましょう。私は、自分が皆の代表として話せるとは思っていません。しかし、私と同じ考えを持つ人もいると思います。まず、今までの世界における西洋の大きな役割は否定できません。つまり、世界は西洋によって引っ張って来られたと言っても過言ではないと思います。ところが、その中で日本は早くも近代化し、そして堂々と世界の先進国に仲間入りし、世界の最前線で活躍してきました。日本は、これから、自らの国を発展させようと思っている私達にとって、多くの学べる経験をもっている国なのです。それを学ぶために、マレーシア、インドネシア、タイ、ラオス、...などの多くの国からの学生達は、日本を目指して、日本へ留学に来ています。もちろん、実際にここへ来た私たちは、実に多くのことを学んだと思います。しかしながら、どこの国にもいいところもあれば、よくないところもある。今回は、来る前に思っていたこととあまりにもかけ離れたところの一つについて、話します。

海外では、日本人の技術者は、よりいいものを作るために仕事の上で絶対妥協しないことでよく知られています。ところが、日本に来て実際に感じたことはそれと正反対なのです。日本人は、自分が正しいと思うときでも、そうと主張しないような気がします。いいことはいつもよくて、よくないことはいつもよくないから主張する必要がない。また調和を守るため強く自己主張しないほうがいいと言うのは分かりますが、何も言わなければ何も分かりません。私と留学生の友達が、最もよく聞かれる質問の一つは、「なぜ、留学先に日本を選んだのですか」という質問です。確かに、お金のことだけを考えて来た人もいると思いますが、それ以上に価値のあるものを目指して来た人も大勢いると思います。日本の方がいいと思って、日本へ来たんのです。他の国のやり方ではなく、ここでのやり方を勉強しに来たんのです。全然、いいところがなければ、ここまで発展して来られたはずがありません。日本は、そんなに大きな国ではありません。それに天然資源も豊富な方ではないのに、なぜここまで来られたんのですか。私達には、その勤勉さ、その精神、その経験が必要なのです。

つまり、私が言いたいことは、日本人は他の先進国に対して、劣等感を感じているように見えるのです。今日本はもう、誰をも追いかける立場ではなく、追われる方なのです。今は、逆に他の人 に教えなければならない立場にあるので、皆の前にしっかりと立て、引っ張って行ってもらえると期待しています。

亀山太郎（学生）

私がラオスで得た印象で最も強かったのは、子ども達のまばゆい目の輝きでした。子ども達とは計四日一緒に過ごさせてもらいましたが、その中でも特に楽しかったのはノンニエン小学校でのひとときでした。凱旋門から三つに延びる道路の真ん中を選び、しばらく行って右に曲がるとそこにその小学校はありました。周りを水牛のたむろする水田に囲まれ、校庭を大きな木で擁されたノンニエンは夢のような小学校でした。私たちを迎えてくれた子ども達の笑顔のなんと素敵なこと、一点も邪気のない目で見つめられて、私は思わず目をそらせてしまいました。それ程までにまっすぐな目だったのです。それから私たちはいろいろなことをして遊びました。粘土をこねたり、木に登ったり、ペットボトルロケットを飛ばしたり、本当にたくさんのことをしました。中でも嬉しかったのは、私の作った折り紙の風車をとても大事にしてくれたことでした。それは折り紙に切れ目を入れて、セロハンテープで留めただけの稚拙なものでしたが、それを手にした子ども達は本物の花のように輝きました。子ども達に手を引かれながら私は新しく勇気と自信を与えてもらったような気がします。

あの土と汗の健康な匂いのするノンニエンの子ども達をわたしは忘れません。来年も是非ラオスに行き、成長した子ども達に会いたいと思います。

大竹　浩介（学生）

ぼくは、ラオスに行く前、本屋さんなどでラオスとはどんな国なのか少し調べてみようと思ったのですがあまり資料がなく、会員の人達の話でしか知ることが出来なかったのでよく分からないまま出発しました。

タイからラオスに入った第一印象は、なんかオキナワの基地みたいだという感じでした。土は赤く、空は、雲はないけれど青くもないわりとベタッとした水色でした。それからサワッディーカップ（こんにちは）からサバーイディーになっていよいよラオスの日々が始まりました。会の事務所は作りが長屋みたいな感じで、一階は本がいっぱいあって子どもがいつでも入ってこられるようになっており、二階には会の人が泊まれる部屋がありました。部屋は泊まるには全く問題ありませんが、イメージは座敷牢みたいでした。

ビエンチャンでの生活は基本的に午前中は絵本作家のやべみつのりさんと長野ヒデ子さんの助手をしながらいろいろな小学校を回って、午後は昼寝でした。ぼくはいつもビデオをまわしていたので第三者っぽくなっていたのですが、ノンニエン小学校の少年少女とペットボトルロケットで騒いだり粘土で遊んだときはとても近づけたように思いました。彼らが用意してきた粘土は、たんぼみたいなところや庭から持ってきたみたいなもので、葉っぱやいろんなものが入っていたりします。みなさん好きなものを作っているのですが、なんといっても携帯電話をよく作ります。フルーツと携帯電話、仏像と携帯電話いった具合でまるでハンバーガーとポテトの関係みたいです。でも本当に元気でいい少年少女でした。

面川　裕香（ボランティア）

親愛なるあなたへ

お元気ですか？日本はまだ寒いかしら？今わたしは気温26度のラオスに来ています。今回はいつもの気ままな一人旅ではなく、「ラオスの子どもに絵本を送る会」の引率者兼通訳（といってもタイ語しかできませんが、ラオス語とタイ語ってすごくよく似ているのよ、だから殆ど不自由していません）としての参加です。

正直言うと最初は、ラオスには三、四日いて、残りの日程をかつての留学先、バンコクで過ごそうと思っていたの。わたしにとってそれほどラオスというのは強く心を引かれる存

在ではなかったから。現地入りした日も、物質面の貧しさばかりが目について、「ああ、 早くバンコクに帰りたいなぁ」なんて事ばかり考えていたわ。なぜなら、ラオスって本屋さんが一軒もないのよ、信じられる？活字中毒のわたしには耐えられない状況。それに、いざ絵を描こうと思っても、画材だってろくに揃わないし。

そりゃ勿論、お金を出せば買うことは出来るのだけれど、でもそれってわたしが外国人で多少なりともお金を持っているから出来るだけのことでしょ？現地の人はね、ペーパーアニメーション（子どもの頃作ったパラパラマンガみたいなもの）作りの時にわたしが何気なく貼った、たった一切れのセロハンテープですらも、何回も丁寧に剥がしては再利用したりしているんだから。どれくらいモノが不足しているか、想像がつくでしょ？

でも、その時ふっと気がついたの。そんな状況だからこそ、この会の存在、目的はとても重要なんだ、って。だって本の面白さを知らないまま、そして絵を楽しむ（書いたり、見たりね）事をしないまま一生を終えるなんて、大海にいながら水槽程度の空間でしか泳がない、海の広さそして深さを知らない魚みたいだと思わない？そんなの勿体ないもの。

まあそんな訳で、この国に入ってからすでに十日経っているけれど、まだ抜け出せそうにありません。それは、例えば「飛行機が飛ばない」なんていう物理的理由（そういうこともたまにはあるらしいのですが）なんかではなくって、全くもってわたしの個人的理由。それはね、けっして「この国の人達は貧しいけれどわたしたちよりも高尚な魂をもっています、ああ感動」なんていう、安っぽいキャッチコピーみたいなことでは決してないの。

ただわたしが初めて本を読んだときのあの感動を、この国の人達の姿を借りてもう一度味わいたいが為に、半袖シャツから出た腕を蚊に刺されながら、毎日子ども達と遊んでいます。

今回はバンコクに寄らないつもりだから、しゃれたお土産なんてたぶん買えないけれど、でもその代わり、もっともっとずっと素敵なお土産話をあなたにあげられると思うよ。初めて本の面白さに触れた、まさにその瞬間のラオスの子ども達の写真を添えて。

気になるのは、日本のこと。

森　透

日本の学校のコンピュータ教育を、小学校で取材したことがあります。そこで聞かされたのは、コンピュータが導入されても、コンピュータに強い先生がいなければ宝の持ち腐れになる。そういう先生がいてもよその学校に行ってしまうとそれまで。また、コンピュータはすぐに古くなってしまうものだ、といったことでした。

これを聞いて思いだしたのが図書箱。図書箱を配付した学校の先生がどれだけ本に対してマインドを持ってくれるかが、子どもと本を結ぶポイントだとして、先生向けのセミナーを開いているわけですが、そうか、日本人もラオスと同じような問題を抱えているんだ、と気づかされたのです。人を啓蒙するなどというプロジェクトのなかにいると、そのへんを忘れがちになってしまいます。

私たちは二言目には「ラオスには本がない」と人にいいます。そうアピールして寄付を募り、本や本をめぐるさまざまな技術をラオスに提供します。しかし、これでは、すべきことの半分しかしていないように思えてなりません。

本はないだろうが、かといって豊かな人生がないわけではない、ということです。援助という行為は、自分は豊か、相手は貧しいと決めつける作業になってしまう毒を含んでいます。また援助を受ける人にとっても援助はおいしい毒になる危険性があります。

シェンクアンの教育委員会の人からたずねられました。「あなたの団体はいつまで私たちを支援してくれるのですか」。また、日本の寄付提供者からも「このプロジェクトは、いつ完了するのですか」と質問されました。

私たちの活動の原点は「本の楽しさを知ってほしい。本を通じて自分の世界を豊かにしてほしい」ということです。私たちの活動は、絵本を送るというハードの提供からスタートしました。今は、ラオスの人が本をつくり、ラオスの人が人を育てるためのソフトの提供に移っています。そうしたなかで、ラオスの人々に、そして日本の人々に何を訴え、どういう関係をつくっていくのか。ますます私たちの哲学が問われています。

１９９７年　活動計画書

96年の活動報告、会計報告でも明らかなように、財政状況が厳しくなっており、また、子ども文化センターの運営などでも問題が出てきています。そこで本年も活動のすそ野を拡げるよりも、これまで続けてきたプロジェクトの評価と反省をおこなう中で、質の向上を心がけようと考えています。ただし、大きな流れの中では、それぞれのプロジェクトがラオス人の自主的な運営に結びつくような方向性で、より注意深く対応していきたいと考えています。

現時点では認められていませんが、現地で図書の販売をして自主財源を確保するなど、何らかの糸口を見つけたいと考えています。謄写版を用いた手作り紙芝居の普及も軌道に乗せたく考えています。

［出版プロジェクト］

●『文字・数字絵本』の配付。ラオスの自信作を、ラオス周辺の地域にも配付できる可能性を求めて。

『文字・数字絵本』のように、ラオス人自身が自己の文化に自信を持つことに結びつく作品作りを重ねることが、作者の意欲と自主性を高め、やがては経済的自立の可能性を高めることになると考えています。

『文字・数字絵本』の配布は、国立図書館の配布計画が完成し次第の実施となります。『数字絵本』は文字を使っていないのでインドシナ諸国での配布も可能であり、『文字絵本』の東北タイでの利用と合わせ、ラオス文化を周辺地域に紹介する視点から、各種の可能性を追求していきたいと思っています。

●ラオス初の『絵とき辞書』。好評につき、第３版の増刷と配付。

多くの方々のご協力により出版したラオス初の子ども用国語辞典『絵とき辞書』は、現地で大好評で迎えられています。データの更新などの作業を行ったため、計画より大幅に遅れ、第３版3,000部が２月末に完成しました。４月中の配布を目指し、調整中です。さらに内容に更新、訂正すべき箇所がみつかり、作者から改訂したいとの希望があるため、第４版出版の前に作業をする必要がでてきました。

各小中高等学校へ希望通り２冊ずつ配布するのは、費用の捻出が大変ですが、地方の学校の先生と直接話す機会が生まれ、状況の把握や次のプロジェクトの立案に非常に有効です。移動図書箱や図書袋と同時に配布しながら、今後も調査を兼ねて行っていきたいと考えています。

●古典再版・創作絵本出版は、バイラーン作品を計画。

古典再版と創作絵本出版は候補作品が現地事務所に多数寄せられており、現在調整中です。本年はそれぞれ２種程度出版を計画しています。

古典は新たに「バイラーン」の作品の出版を行いたいと考えています。バイラーンは、おもに僧侶などの手で椰子の葉に書かれた古典文献で、内容は説話から医学知識、教典など多岐に渡り、学問的重要性・価値が注目を集めています。その出版はラオスの子どもたちが自国の文化を見直す良い機会になると共に、文化保存といった観点からも大変意義があります。出版候補作品の内容を検討するために昨年発足した「出版委員会」は、残念ながら正式な活動許可がおりませんでしたが、質のいい作品を出版するため、本年も現地出版コーディネーター、ドゥアンドァンさんに作品の選定を依頼します。

●紙芝居。作品づくり、出版、そして演じるまで、すべてを現地で。

子どもたちが皆で「楽しさ」を共有でき、「自己表現」できる紙芝居。子どもから大人まで作り手として参加でき、ラオスの現実に即したものだろうとの視点から、昨年の図画工作セミナーで制作が試みられてました。その後、講師のやべみつのりさんが研究を重ね、色インクを用いた謄写版印刷は表現豊かなメディアとなることがわかりました。またセミナー時、ラオスの教育関係者の方々の紙芝居に対する評価は予想以上に高く、謄写版印刷の技術指導と共に、将来子どもたちの教育環境改善の有力な手だての一つと判断しました。

本年は、紙芝居制作のラオス人リーダーをまず育成し、さらにその人がラオス人リーダーを育てるという２段階の紙芝居普及を計画しています。普及の一環として、ラオス人の

手による紙芝居作品を２タイトルほど出版する予定としています。

［移動図書箱・図書袋プロジェ
●まだまだニーズが高い。
図書箱・図書袋製作/配布セミ ー。

箱や袋は各学校の規模に合わせて渡し、配付時に利用方法などを指導する配布セミナーを行います。

図書箱には150冊ほどの図書が入りますが、図書袋は60～70冊程度です。そのため図書袋は各校２袋づつ配布したいとの希望もあり、予算等を早急に検討する必要があります。

移動図書箱は、十分利用されない学校もあるなど、これまでも問題点が指摘されていました。しかし現地調査の結果、地方の教育関係者より、多くの地域で唯一の図書であることから、今なおきわめて強い配布希望があることが解りました。ラオス国立図書館と協議の上、本年の製作、配布は以下のように予定しています。

	図書箱	図書袋
ヴィエンチャン県		
フアン郡	26箱	39袋
メート郡	１箱	18袋
カーシィ郡	８箱	34袋
ルアンパバーン県	30箱	30袋
他のＮＧＯに託す		９袋
計	65箱	120袋

●図書箱を届けたあとのフォローアップと図書の補充が欠かせない。

調査を通じ、図書箱配布後のケアの重要性が指摘されています。昨年度末までに520箱の図書箱、200袋の図書袋が配布を完了。以前に配布された図書箱の本は読み古されてぼろぼろになったり、新たな補充がないため、飽きられてしまった箱もあります。新たな本を補充し、子ども達の本への関心を持続させることは新たな図書箱の配布と同様に重要です。

そこで本年も 年に引き続き、補充用の本の購入を増やすように計画して ます。現地での希望もありこれらの本には、一部タイで購入する技術書なども入れる予定です。

［子ども文化センタープロジェクト］
●各地に広がる「子ども文化センター」。熱心な現地関係者たち。

現在会では、ヴィエンチャン、ボリカムサイ、サヤブリの３か所の子ども文化センター（ＣＣＣ）の運営を支援しています。特に地方の２か所は、現地も大変評判が高い活動を展開しています。また、本年は、ルアンパバーンでの開設も予定されており、現在提供される建物の修理計画を作成しているところです。場所は市の中心部にあり、多くの子どもたちの利用が期待できます。さらに現地の関係者達はみな大変熱心で、本年３月に行った教育関係者達への造形セミナーの手応えも大きかったため、教育省のブンマー氏に画材等の管理を委託し、いつでも仮スタートできるようになっています。ユネスコの世界遺産に指定された静かな佇まいの古都ルアンパバーン。子どもたちの教育を多角的に支援する拠点として期待されています。

昨年より進められている、ボリカムサイのＣＣＣの図書室建設については、本年夏に完成する予定で準備が進んでいます。この建物は、ＣＣＣの敷地内にたてられ、子ども用図書室、高学年用読書室と教室、そして事務室の３棟からなる建物です。

これまで小学校の空き室を利用していたため、場所の狭さが指摘されていたサヤブリのＣＣＣは、以前会社の独身寮として使われていた建物をもらい受けることができ、昨年夏場所を移転しました。しかし、その建物は傷みがひどく、子どもが床を踏み抜くというような危険があるため、修理を計画し ています。

●３年目を迎える専門家派遣セミナー。より戦略的な視点が求められる時期に。

ラオスの子どもたちに、自己表現の世界に触れてもらおうと、昨年実施した日本人専門家による絵画造形セミナーを継続、発展させ、本年も同じ専門家によるセミナーを２月から３月にかけて開催します。やべみつのりさん、尾崎曜子さん、そしてボランティアで長野ヒデ子さん、中村由希さんといった作家の方々が、若い助っ人と共に参加し、現地で教室を開きます。

一昨年と昨年の経験から、本年も子どもに直接接して伝える方式と、指導者を育てるためのリーダー育成プログラムとの２本立てでおこないます。また現地からの要望により、「紙芝居制作」「発見遊び」のためのセミナーも昨年に引き続き行うことにしています。これまでの継続したセミナーの展開により、参加者の作品の質が上昇しており、ラオス人指導者育成という目的への糸口が、少し見えてきました。

一昨年行い大変好評であった「身体表現教室」を、本年も１月から４月にかけて、あさぬまちずこ氏を派

遣して行います。今回は、期間がより長くなったことを生かして、現地での指導者の育成も行っていきたいと考えています。

［子ども文庫プロジェクト］

●学校図書室整備のリクエストが次々と。しかし、絞り込んで充実化を。

昨年はヴィエンチャンに加え、サヤブリ県やルアンパバーン県といった地方での図書室整備も行い、合計19校の支援を行っています。この整備事業には現地からの要請もたいへん多く、支援要請学校リストが届いています。しかし本年はプロジェクトを担ってきた現地スタッフの交代があり、新たな展開が困難になります。そのため本年は既に整備した図書室の安定化に重点を置き、新規は３校ほどに抑えます。今後、どのような順番で、どこまで支援を続けていくのか、さらに、どうすれば自立できるのか、その方向も探っていきたいと考えています。

●拡大した事務所内子ども文庫。

会事務所と子ども文庫は、昨年秋に移転しましたが、前事務所と離れていない場所のため、引き続き多くの子どもたちがやってきています。建物の30坪ほどが子ども文庫に当てられ、これまでよりのびのびと活動できるスペースとなりました。

会の子ども文庫は、近所の子どもが、ふらりといつでも立ち寄れる場を作ることを目指し、成果を上げています。学校の昼休み時、下校後など中学生を含む多くの子どもが利用しています。昨年夏より、文庫管理にアシスタントが１人加わり、より発展させていけそうです。

［造形教室指導者育成プロジェクト］

●ラオス人専門家を育てるために。

95年に始まった日本人専門家派遣セミナーが、今年は少々形を変えて動き始めます。

２月から３月にかけて数名の専門家を派遣し、会事務所とＣＣＣを中心に造形教室を開催しますが、その際、紙芝居制作や「発見遊び」といったことに関心がある若手のラオス人で、才能、意欲ともに十分なリーダー候補を見つけ、年間を通じて支援し指導者の卵として育成するテスト事業をおこないます。

これまで、ラオス人を育てるラオス人リーダーの育成は、なかなか視野に入れることが出来ませんでした。今後は、プロジェクトの自立を念頭においた展開を計っていきたいと考えています。

＜会の運営＞

●東京事務所は、いっそうの機能充実と自主財源の確保が課題。

昨年秋から新スタッフが加わりました。週５日体制での常勤で、ようやくきめの細かい対応が可能な体制になってきました。加えて従来からのスタッフは週２日の事務所勤務と在宅での勤務を引き続き行います。これにより、長年の懸案であった一部ボランティアの過重ワークが軽減されることが期待されます。

最近は全国の小中学校、メディアからの問い合わせが多くなるなど、相変わらず増え続ける事務処理作業ですが、より効率的な処理のため、新たなパソコンの導入を検討中です。現地事務所とのデータ交換と、ボランティア間の連絡をスムーズにする目的があります。またインターネットで情報発信し、より広範な広報を計画しています。

長年の不況の影響がますます深刻化し、活動財源の確保がよりいっそう困難な状況を迎えています。とりわけ、個人寄付の減少が昨年来目立ってきています。

事業の急速な拡大の中、従来に増して新たな資金確保の道を開拓する必要があります。しかし現実には各種プロジェクト経費は各助成金・配分金の枠の中では収まりきらないこと多く、個人寄付を基盤とする自己資金での充当が増えています。現地の要請に応えるため、機動的に用いることの出来る財源の確保も重要になっています。このような事態に対応するために、本年は進行中のプロジェクトの見直しも必要になる可能性があると考えています。

●現地事務所は、スタッフ交代。

３年以上勤めた現地スタッフ責任者パダプペットが、オーストラリア留学を控えた研修のため、常勤が困難になりました。そこで、昨年末より新たなスタッフの募集を行い、現在１名が研修中です。大変有能であったパダプペットの活動中断は、会の運営にとって大変な痛手となりますが、ラオスの子どもたちの教育環境の改善について学びたいという本人の意思は理解でき、応援できることなので、彼女の今後を期待したいと思います。パダプペットは今年一年、引き続き顧問としてプロジェクト運営の補佐します。

また、昨年夏より新たに会計処理を中心とするスタッフが加わっており、新たな責任者とともに、今後より安定した事務所運営を期待しています。